☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第20号　2000年３月７日（火）

発行　歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
TEL/FAX 078-803-5565

目　次

兵庫津の市民学習会を開催　大国正美… 1
震災復興の発掘調査を検証する－阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム－　藤田明良… 3
シンポジウム参加記　井上勝博… 3
国際シンポジウム「地震から文化財を守る-阪神・淡路大震災-」について　奥村弘… 4
尼崎での市民参加企画－ＮＰＯシンフォニー講演会、ならびに尼崎戦後史聞き取り研究会の取り組み　辻川敦… 6
あおぞら財団の公害問題資料保存事業に関わって　林美帆… 8
文献情報…… 9　新聞記事より……10
お知らせ……14

兵庫津の市民学習会を開催

大　国　正　美

兵庫津の中世から近代をテーマにした市民学習会「よみがえる兵庫津の歴史と街なみ」が、1999年10月から2000年１月にかけて連続３回の日程で開催され、延べ182人が参加した。考古学と文献史学の橋渡しをしようと、史料ネットが主催したもので、市民学習会ながら、これまで研究が空白の地域であり、近年埋蔵文化財の成果が相次いでいるだけに、研究者も多数参加した。今後、研究者を軸にした継続的な研究会を作る動きも模索している。

開催の背景とねらい

史料ネットでは、市民講座が被災自治体を一巡した後は、やや狭い地域で地域密着型の講座を開設しており、兵庫津の講座は神戸市東灘区の森南地区に次いで２回目となった。

兵庫津は、万葉集や行基や平清盛などによる港湾修築以来の豊かな歴史がありながら、これまで研究が十分なされたとは言い難く、文献史料なども十分検討されたとはいえない。「神戸は開港後の新しい町」という歴史観も広く行き渡っている。史料ネットが被災史料を救出しようとした時に、最も障害になったのは、この歴史観そのものだったといっても過言ではない。

一方兵庫津に博物館を建設する構想が兵庫県を軸に検討されている。神戸市の対応がはっきりせず、現在は検討が中断されたままだが、行政の狙いには歴史像の構築などよりも、観光振興が大きいとされている。こうした状況の中で、研究者が市民と歴史像を共有することが最も求められており、連続講座として企画した。

幸い、史料ネットが年末に出版した『歴史のなかの平家と神戸』で新しい兵庫津像がいくつか浮かんでいるほか、近年、復興事業に絡んで、20次に及ぶ埋蔵文化財調査が行われている。それらをあらためて市民に広く還元していくことも重要で、今回の講座の主眼に据えた。

講座に先だって、99年10月３日、文部省科学研究助成金による研究会が行われ、兵庫県教育委員会の岡田章一、神戸市教育委員会の内藤俊哉、史料ネット事務局長の藤田明良、神戸大学の森田竜雄の各氏と大国が準備報告を行った。

第１回－中世の街並と住民たち

学習会は、10月31日(日)に、中世をテーマに藤田氏が「兵庫嶋の景観と住民－絵図と文献から」、岡田氏が「港町の輪郭を掘る」、内藤氏が「国際色豊かな遺構」と題して報告（参加者64人）。詳細な内容については、神戸史学会の『歴史と神戸』の誌上で報告されるので、ここでは簡単な紹介に止める。

藤田氏の報告は、文献の立場から兵庫津の中世を再検討したもので、中世の地名や船主などの屋号、問丸たちの固有名詞に注目し住民構成や景観に迫った。岡田氏の報告は、中世から近世にかけての町の広がりが、狭い地域ながら確

認できた。これによって、近世への町の膨張が類推できる。また倉庫と思われる遺構や中世の町の境界を示す溝なども報告があった。内藤氏の報告は、兵庫区宮前町での15次調査で、13世紀から19世紀にかけての遺構を確認し、そのうち第６遺構面で、中世の瓦を使用した大規模な礎石建物が３棟以上確認できたこと、貿易陶磁器が大量に出土したことが報告された。

第２回－近世の生活空間と災害

12月19日(日)には、近世をテーマに内藤氏が「出土した街並と災害の跡」、大国が「兵庫津の景観と街並の発展」のタイトルで報告した（参加者80人）。

内藤氏の報告は15次調査の近世分の報告であり、慶長元年（1596）の慶長大地震の噴砂の痕跡や、近世は整地が繰り返されていること、宝永の大火と見られる大火災の痕跡が明確に確認できたことを説明。さらに江戸後期には裏へ建てましがされ井戸の数が増えて行くことも確認出来た。出土物も豊富で庶民の生活を復元した。大国は町ごとの人口統計の変化をもとに近世の兵庫津の停滞説に疑問を投げかけ、北部や内陸部の発展の大きさを強調。また豊富な絵図史料で、町の構造が変化する仮説を提示した。

第３回－近代の港湾と都市

最後となった2000年１月23日(日)は近代がテーマで、広島大学の布川弘氏が「港湾労働者から見た兵庫と神戸」、史料ネット代表幹事の奥村弘氏が「近代史のなかの『兵庫津』」と題して講演した（参加者38人）。

布川氏は、これまで注目されてこなかった港湾労働者に着目、その熟練性から、イエを媒介とした近世との連続性の重要性を強調。さらに沖仲仕と浜仲仕との違いに着目し、外国人商人との対立を通した商権確立運動に言及し仲仕組合の形成を再評価した。奥村氏は、兵庫運河の開削にかかわった八尾家文書の震災後の救出保全をめぐるエピソードを紹介しながら、歴史研究者と市民との史料をめぐる意識のズレをあらためて問題提起。その原因としてモダン都市神戸のイメージが形成されるプロセスを検証し、そのもろさを指摘。地域の再発見のためにも、歴史資料の保存の重要性を強調した。

全体を通しての評価と反省

全体として、考古学の成果に注目することの重要性や、絵図史料や数量データの検討、文献の読み直し、港湾労働者などこれまで注目されてこなかった存在への注目、歴史意識の捉え直しなど新たな提起が相次いだ。また毎回写真パネルや考古遺物、文書や写真を展示し、休憩時間を使って説明会を行った。歴史資料をより身近にする試みとして注目されてよいだろう。参加者の感想文を読む範囲では内容は極めて好評で、学習会の継続を望む声が多かった。また新たな史料情報が入るなど、大きな成果を生んだ。

反省としては、ＰＲの不十分さがあげられる。事前に兵庫区役所とコンタクトを持ったが、史料ネットの意義の説明が十分行き届かず、当初は協力を得られなかった。また１、２回目が三宮だったこともあって、兵庫区民の参加が少なく、急遽、２回目から人脈を使って関係を作り、ＰＲに乗り出した。また中世、近世、近代それぞれ参加する層に違いがあったことも今後の展開を考える上で念頭に置くべきだろう。

今後は、考古学、文献史学、歴史地理学の研究者を集めた研究会を定期的に持てないか、検討を始めている。具体的には各分野での資料の整備と情報交換、そして新研究の報告などである。ただ神戸市文書館と史料ネットが協力して、まず神戸市内の巡回調査の再検討をすることが決まっており、それを先に着手し、その中で展開を検討したいと思っている。関心のあるかたの参加を呼びかけたい。

（おおくにまさみ、神戸深江生活文化史料館）

（第２回学習会への村山俊男さんの感想文より）今回、講演会たるものにはじめて参加したのですが、準備から手伝わせてもらい、講演会の用意の仕方の一片が見えたような気がします。

講演のほうは、すべて飲み込めた訳ではありませんが、興味のもてる内容でした。ただ、例えば内藤先生の講演のなかの遺跡の発掘現場の写真で、何をもって土間となすのかということや、大国先生の話は、情報量が多すぎて理解がついていかなかった、といった感想も抱いています。

講演前後や質疑応答時の司会の進め方なども、いい勉強になりました。

震災復興の発掘調査を検証する
―阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム―

藤　田　明　良

昨年12月４日(土)、神戸市長田区のピフレホールで、阪神淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム（主催：シンポジウム実行委、主管：兵庫県埋蔵文化財調査事務所）が開催された。５年前の震災後、復興工事が急がれる中で、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財調査をどうするかということが大問題となった。当シンポは５年間の被災地の埋蔵文化財調査を検証し、その教訓を未来の大災害に活かす目的で企画された。中心となったのは兵庫県教育委員会だが、史料ネット事務局長の藤田が当初から実行委員会に入り、また後援団体として宣伝等に協力した。

当日はまず、大村敬道・県調査事務所副所長が、被災地の遺跡分布と震災後の調査体制づくり、調査成果概要を報告、県が文化財保護法の原則を貫く姿勢で当初から文化庁や市町村と調整を進めたこと、その過程で、全国自治体への支援職員派遣要請や、通常は原因者(事業者)負担が原則の調査費用を公費で負担する等、特例措置が次々と打ち出されたことが紹介された。

その後、尼崎市の武庫庄遺跡や猪名荘遺跡、神戸市の兵庫津遺跡など、調査成果の具体的報告を挟んで、各界からの意見表明があった。その中で、文化庁の岡村道雄氏は、地震直後の現地視察など文化庁の初期対応と支援措置策定経過等を述べ、神戸市が５年間の調査免除を強く要請していたこと等に触れた。考古学界から対策にあたっていた立命館大学の和田晴吾氏は、調査は復興の妨げという圧力を跳ね返せた理由として、戦後の遺跡保存運動と日頃の地道な調査発掘によって、埋蔵文化財保護の世論が形成されていたことを強調した。

史料ネットからは藤田が意見表明に立ち、街の再生にあたり住民の中から、足元の歴史を振り返る動きや、他ではありふれた遺跡や歴史資料も自分たちの地域にとってはかけがえのない財産という認識が広がっていること、また台湾大地震の復興のなかで、文化財について阪神大震災が先例として重視されていること等を紹介、その上で、研究者向けの報告書作成や地域社会の中での調査成果の活用の問題を、今後の課題として挙げた。また猪名荘遺跡を学ぶ会の川本ミハルさんも住民の立場から、遺跡を目にした時の感動と文化遺産が再開発事業に活かされないもどかしさを訴え、会場に大きな共感を呼んだ。

当日の参加者は市民、行政・マスコミ関係者など約350人。その中には震災後に調査支援に駆けつけた他府県の埋文職員の姿も多くみられた。なお、実行委員会では、このシンポジウムの記録集を刊行する予定。（当日のレジュメは、本ニュース９ページの文献情報参照）。

（ふじたあきよし、天理大学国際文化学部助教授、史料ネット事務局長）

シンポジウム参加記

井 上 勝 博

後半のパネルディスカッションが印象に残った。被災地の埋文行政が非日常的で極限的な状況のなかで、いかなる努力をし、どのような対応をとってきたか、「今だから言える」という裏話や、当事者の思いにまで踏み込んだ率直な発言が活発にかわされ、興味深く聞けた。さらに、今後大地震への対応をどうすべきかという点まで議論が発展したことは、有益であった。

しかし、一面で、文化財行政と市民社会の関係がいかにあったか、今後のよりよい関係の構築を展望しつつ、その現実と問題点を検証するという方向性は、あまり強く展開されなかったのではないか。それは、このシンポの趣旨からしてやむを得なかったのかもしれないが、例えばボランティアの立場、地元マスコミの立場、地元住民の立場からそれぞれ列席していたパネラーから、発言を引き出すような進行にならなかったのは、象徴的であったように思う。

さらに、こうした全体の基調と関連して、行政当事者の発言からは、行政とボランティアと

の積極的な関係を築くという方向に対して、きわめて慎重な姿勢がみてとれた。行政とボランティアの関係については、配慮しなければならない様々な問題があり、慎重な態度をとらざるを得ないことは理解できるが、そうしたハードルを何とかクリアしていこうという方向に、舵をとることはできないものなのだろうか。

（いのうえかつひろ、神戸大学文学部講師）

（神戸新聞　1999年12月19日朝刊　第１面より、なお10頁にも関連記事紹介）

国際シンポジウム「地震から文化財を守る －阪神・淡路大震災－」について

奥　村　　弘

本ニュースレター第19号で、台湾の大地震についてレポートを掲載しました。2000年１月28日(金)、その後の台湾の状況を知り、阪神・淡路大震災の経験を伝えること、さらに大規模災害から文化財を守るという課題に対して、二つの大地震からなにが教訓となるかを議論することを目的として、国際シンポジウムが神戸大学文学部の主催で行われました。このシンポには史料ネットも共催となり、その準備、宣伝に当たりました。本号ではその概要をお伝えします。

台湾からの報告

台湾側からの出席者は、国立故宮博物院書畫処の張世賢さん、国立台湾美術館の林麗玉さん、国立歴史博物館の黄光男館長、国立芸術学院伝統芸術研究所教授の林会承さん、国立成功大学建築系教授の徐明福さんら20名余、これに日本側から、文化財に関係する大学教員・美術館・博物館・県市文化財保護課の職員など、70名あまりが参加しました。

午前中は、集集大地震による文化財被害とこれへの対応が台湾側から詳しく報告されました。それぞれ興味深いものでしたが、その中でも特に私が興味をもったことが二つあります。

ひとつは、林さんが報告された建築系の研究者を中心とする動きでした。これについては、台湾調査の際にもすこし聞いていたのですが、今回、活動の詳細が明らかにされました。９月21日の地震の翌日から各地の研究者が建築物に対する保全活動をはじめ、わずか12日後に文化財レスキュー組が、全国の11大学の研究者が協力して結成されたこと、一ヶ月後には、未指定の文化財も含めた調査がはじまったことなど、その活動の早さと規模、扱う対象の幅の広さには改めて驚かされました。

もうひとつは、阪神・淡路大震災と同様の困難があったことが、具体的に報告されたことです。張さんは、大統領選挙の影響もあり被災家屋の解体撤去が極めて早くおこなわれたため、重要な文化財がゴミと化してしまう例があったことを報告しました。また黄さんは、現状での困難として三点を指摘しました。外から(中央から)被災地(地方)に入って文化財保全活動をするということに対する反発、所有者の文化財への理解、骨董品を扱う業者などがいるなかで文化財を文化財として博物館などで保存すること。

日本側から提起した論点

午後は、「美術工芸・史料の保存修復と博物館展示の課題」と「文化財建築の保存修復の課題」の二つに分かれて議論を進めました。前者の分科会では、美術館・博物館における具体的な破損状況および対応などが紹介されました。また史料ネットの活動については、尼崎市立地域研究史料館の辻川敦さんが、スライドをつかって丁寧に説明されました。また会場の外には史料ネットの活動パネルを展示しましたが、休憩の際、参加者の関心を集めたように思います。

私は前者に出席していたので、文化財建築について詳しい議論はわからないのですが、文化財建築の分科会を担当していた神戸大学工学部教授の足立祐司さんは、ペーパーの中で阪神・淡路大震災時を総括して、平時の体制を抜きにして緊急の体制を語ることはできないこと、平時における対応において基本となることは、歴史的建造物とはなぜ大事にしなければならないのかという市民のコンセンサスであることを強調し、歴史的建造物の保存が、単に技術的な問題に帰結するものではないことを指摘しています。このことは、午後の議論で史料ネットの活動を報告した辻川敦さんの議論と共通するものであり、極めて重要な指摘であると感じました。

シンポジウムのまとめとして

私自身は、シンポ全体のまとめ、特に日本・台湾に共通する課題について担当し最後に発言しましたので、午後の分科会の内容は、このまとめを紹介することで代えたいと思います。

シンポジウムでは、文化財を大規模災害から守るためには、必ずいつか起こることを前提に日常的に何ができるのかと、大規模災害が起こった場合、具体的にいかに対処するかという、相互に深い関係を持つ二つの観点から考える必要があることが、改めて示されたと考えます。

その際、各報告から提示された重要な点は、おおよそ三つに整理できます。第一は、大災害から文化財を守るためには、文化財の価値について広範な市民の理解が必要であるという基本的な問題です。文化財保全のために耐震構造にするということ一つをとってみても、それには多くの費用がかかります。また建物の解体工事を急がずこれを復旧するという問題は、費用がかかるとともに、文化財としての価値について所有者の理解が極めて重要です。さらに民間の歴史資料や未指定建築物などへの対応は、市民の理解が必須です。市民の理解が重要であるということは当然かもしれません。しかしながら台湾でも阪神・淡路大震災でも、市民の理解の度合が文化財保全において決定的な位置を占めたことは、どうしても強調しておきたい点です。

第二は、文化財関係者のネットワークの重要性です。台湾での未指定を含めた建築文化財の救援活動、日本での阪神・淡路大震災の総括に基づいた全国美術館会議の救援ネットワークと水害にあった高知県立美術館への支援、歴史文化を中心とした被災地での史料ネットの活動など、それぞれの本来の持ち場や専門を超えた連携が非常に重要であるということです。

被災地の文化財は、相互に関係しながら多様な形で存在しており、これを全体として保全していこうとするなら、専門や持ち場をこえて、連携を取りながら素早く活動することが極めて重要です。これも当然のことのように思われていますけれども、そういう連携が、十分でなかったことが、阪神・淡路大震災時の動物園間の密度の高い連携を参考として、ブリヂストン美術館の貝塚健さんから報告されました。貝塚さんは、「阪神・淡路大震災についてまだ口にできないこと」があるのではないかと述べていました。五年がすぎてはじめて語れることを含めた深い分析を、阪神・淡路大震災の経験から進めていく努力が今後も重要であると思われます。

第三は、大規模災害への対応は、マニュアル化できることとできないことがあるということ、このことの持つ重要性です。大規模災害は、個々の場面では、極めて個性的な形で表れます。したがって、マニュアルどおりにいかないことが、むしろ基本であるということが、午後の美術館・博物館からの報告の中で語られました。

今回の日本と台湾での大地震は、人々が活動していない時間帯に起こりました。これが昼間であればどうなったのか。このことは、今回の経験からだけでは十分判断し得ない問題です。美術館等、開館時間内で観客がいる場合、いかなることが起こるかということ一つをとっても、これは今回の体験からはわからないことです。

この点、全国美術館会議が具体的対策についての結論をあえて出さないという方針を出したことは、極めて示唆的なことだと思います。現場において自分の頭でどう処理していくかが基本で、そのために具体的な経験をより多く共有化していくことが、ますます重要になります。

なお今回のシンポジウムでは、直接の課題とはなりませんでしたが、大規模災害の記憶をどう引き継いでいくかということ、次の大規模災害に対して、市民が文化的な対抗力をいかに持ちうるのかということも、文化財に関係する人々にとって大きな課題であると思われます。震災後５年を経た神戸では、これが重要な課題となりつつあります。

この点を含めて、日本と台湾の地震後の文化財保全活動、文化財を生かした社会の復興というものを考えていかなければならないのではないでしょうか。以上が、シンポジウムで述べた最後のまとめを整理したものです。

台湾と日本、20世紀の最後に起こった大地震からの復興は、まだ過去の出来事ではありません。文化財についての活動も困難を抱えながら今も進行中です。今回のシンポで議論を深める中、現れ方は異なるものの両者には共通する問題が驚くほど多いことが改めて実感されました。今後も息の長い交流をすすめ、多くの人々がその経験を共有していくことが重要であると考えています。歴史資料ネットワークでも、さらにこの問題を考えていく予定です。さまざまな場でのご協力をお願いすることも多いかと思いますが、気軽に応じてくださるようお願いします。

（おくむらひろし、神戸大学文学部助教授、史料ネット代表幹事）

尼崎での市民参加企画
－ＮＰＯシンフォニー講演会、ならびに尼崎戦後史聞き取り研究会の取り組み－

辻　川　　敦

この間、尼崎で開催された、史料ネット関連の市民参加企画について報告する。

ＮＰＯシンフォニーによる歴史文化講演会

まちづくり歴史文化交流事業 講演と交流の夕べ第２回 ﾃｰﾏ「まちを探検する、まちを発見する!!」 場所　園田学園女子大学 ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　田辺眞人氏（園田学園女子大） 講演　井上眞理子氏 （尼崎探訪家、イラストレーター） 「マンガで再現する私のまち」 河島裕子氏、坂江愛氏、松迫寿代氏 （尼崎市立地域研究史料館） 「まちの歴史の調べ方、教えます」 参加者約80人（ワインパーティ約40人）

第２回となる今回の講演会は、前回同様史料ネット後援企画として実施した。今回は、本ニュースNo.17でも紹介した第１回の成果と反省点を踏まえ、地域の歴史や文化に対してより実践的で、参加者が足を踏み出す契機となるような内容設定をめざした。また、コーディネーターをまじえた会場とのやりとりの時間も設け、より双方向的な企画とした。

結果は前回を上回る参加を得て、具体的・実践的なまちの歴史へのチャレンジを紹介するものとして好評であった。さらに、会場とのやりとりの時間をとったことで、親しみやすく活気ある雰囲気とすることができた。地元の園田学園女子大学との協力関係を作ることができたのも、さまざまな面でプラスであったと言える。

その一方で、全体として事実の発見のおもしろさに話が終始し、身近な歴史が大きな歴史にどうつながるのか、あるいは市民が歴史に取り組むことの意義やまちづくりとの関連性などに

まで、議論を発展させることができなかった。この点は、時間や参加人数の多さなどから、一定の制約のある講演会企画の限界とも言える。むしろ、今回の企画を受けて、より多くの市民の具体的な歴史へのチャレンジをうながし、その実践の積み重ねのなかで、まちづくりにつながる具体的なステップが見えてくるのであろう。

次項に紹介する、尼崎戦後史聞き取り研究会の取り組みもその一つであろうし、シンフォニー自身も尼崎戦後史研などと連携しながら、市民による歴史コンテンツづくりとインターネットによる情報発信などの事業を実施していくなかで、この課題に取り組んでいく予定である。

なお、講演会とセットのワインパーティも、前回同様好評で、このワインパーティ付きというイベント形式は、シンフォニー恒例の人気スタイルとして定着しつつある。

次回第３回講演会は、以上のような成果と反省点を踏まえて、「川」をテーマに５月に開催の予定である。

尼崎戦後史聞き取り研究会の取り組み

通常は月例研究会を開催している尼崎戦後史聞き取り研究会が、この間２回にわたって、会員外からの参加をも募った企画を実施した。

まず、1999年11月28日(日)に実施したのは、市内に残る近代建築のウォッチングツアー。近世以来の城下町として、また明治以来の工業都市として、尼崎には明治～昭和戦前期の洋風近代建築が意外に多く残っている。今回の企画は、建築史の川島智生氏の案内により、これらを歩きながら再発見していこうというものである。

好天のもと20数人が阪神尼崎駅に集まり、まず南西に庄下川を越えて阪神電鉄尼崎倉庫へ。この倉庫は、明治期に阪神電鉄の発電所として建築された煉瓦造りの建物である。続いて、大正期造の旧尼崎警察署。芦屋警察署が正面部分を残して建て替えられることになった今、現存するこの時期のコンクリート造警察建物としては県内唯一、全国的にもめずらしいものであるという。ここでは、建物内もくわしく見学した。

続いて、隣接する城内中学（旧尼崎高等女学校）、城内高校（旧尼崎尋常高等小学校、戦後は市役所としても使われていた）を経て、ふたたび庄下川を越え米澤病院へ。阪神電車からよく見えるこの戦前の病院は、今なお開業中であり、米澤医師のご厚意により中を見学させていただく。戦前来の産婦人科の器具も残っており、最近その雰囲気を活かして映画「岸和田愚連隊」のロケ撮影も行なわれたそうである。

さらに旧城下町を西へ進んで開明小学校へ。学校の南西角の向かいには、やはり戦前造のタイルブロックが特徴的な大津表具店がある。ここから寺町の西端まで来ると、スパニッシュスタイルの洋館がひときわ目立つ。戦前に阪神地方で活躍した建築家・前川悦三の自宅兼アトリエで、竣工は1940年という川島氏の説明を聞く。

ここから北上して、国道２号線を越え東難波へ。ここには、やはりスパニッシュスタイルの日本キリスト教団尼崎教会がある。もとは、大正末から昭和初めにかけて尼崎市長であった上村盛治の私邸で1929年造。ここでも屋内に入れていただき、教会の亀田牧師も交えて、全員で質問し、話し合う時間を持つことができた。

次に、尼崎戦後史聞き取り研究会はこのウォッチングの成果をも踏まえて、2000年１月26日(水)には尼崎市の外郭団体であるあまがさき未来協会と連携する形で、同協会内の会議室を会場に「尼崎の都市イメージを探る」と題する研究会を開催した。ここでも、市職員など会員外の参加を得て、20数人が集まった。

報告内容は、まず写真撮影による現尼崎風景の記録に取り組む榎本利明氏（尼崎造園事業協同組合専務理事）からスライドを使っての説明、続いてさきのＮＰＯ講演会講師を務めた井上眞理子氏によるイラスト入り尼崎探訪記、さらに川島智生氏による近代建築と都市計画から見た尼崎についての問題提起ののち、参加者全員による議論を行なった。マイナスイメージとしての工業都市イメージがつくられるのはいつ頃か、尼崎を含む日本の都市の原型が規定される都市計画立案時期はいつなのか、さらに現状とイメージの相互関係や、これらを踏まえた今後のまちづくりへの提言など、内容は多岐におよんだ。

このように、尼崎においては、都市の現状やまちづくりをも意識した、市民参加、市民主体のさまざまな歴史文化関係の取り組みが、相互に関連性を持ちながら取り組まれている。引き続き、これらのネットワークづくりを進め、成果を積み重ねていきたいと考えている。

（つじかわあつし、尼崎市立地域研究史料館）

（尼崎市内近代建築ウォッチングへの、
松井美枝さんの感想文より）

尼崎の町と近代建築を中心に数時間歩きましたが、一番印象深かったのは、いろいろな顔をもった町だということでした。今まで紡績や工業地帯のおぼろげなイメージと、井上眞理子さんの漫画、阪神尼崎周辺のこと位しか知らなかったのですが、伝統的な近代建築の豊かさが心に刻まれるとともに、商店街や寺町や、下町の裏店やホテル街などいろいろ歩けて楽しかったです。

商店街は昔は尼崎市全域や大阪からもお客を集め、もっともっとにぎわっていたというお話を井上さんからお聞きし、イメージがふくらみました。さまざまな関心を持つ人が集まっていたので、私が１人で歩いていても見落としてしまったようなことも、たくさん気づかされました。

町を見る目が、少し豊かになったような気がします。

あおぞら財団の公害問題資料保存事業に関わって

林　　美　帆

仏教大学の原田敬一先生のゼミ出身の私は、昨年５月から公害資料整理のアルバイトとして、あおぞら財団で勤務することになった。今回は私が財団で見聞し、体験したことをもとに、財団の資料保存活動の一端を報告させていただく。

公害問題資料保存研究会

この研究会は本ニュースNo.18の達脇報告に既報のコアメンバーを中心に、これからの資料保存のあり方や、方法論を確立するために行われているものである。これまで５回の研究会がもたれ、諸問題について検討が行われた。

第１回(1999/6/28)重岡伸泰 西淀川住民運動関係・弁護団資料の保存・整理・分類等方法の事例検討
第２回(7/28)傘木宏夫 あおぞら財団の資料保存活動について/足立義明 患者会活動について
第３回(9/20)津留崎直美 裁判関係資料保存の現状とその意義－公害裁判の場合－
第４回(11/22)佐々木和子 現代資料の公開基準の検討－震災資料の事例検討－
第５回(2000/1/24)片岡法子 西淀川における公害問題資料について

公害問題資料の保存はまさに暗中模索で、研究会の議論も毎回白熱している。次回第６回にてこの１年間の総括が出される予定である。

大阪から公害をなくす会資料調査と移管作業

大阪から公害をなくす会は、大気汚染公害反対運動の中で重要な役割を果たしてきた運動団体である。1999年10月10日、大阪電気通信大学の小田康徳先生とゼミ生、財団からは達脇さんと私が、資料をあおぞら財団の資料保管庫に移管する作業に参加した。

運動団体としては例外的に、かなりきちんと資料が整理保存されているが、事務所が地下にあることもあり、保存条件の悪さが以前から問題になっていた。現在も活動中の団体なので、事務局長林功氏立ち会いのもと、とりあえず現在利用しないであろうを思われる資料を移管した。移管された資料は段ボール箱20箱になり、後日仮目録を作成した。

地方史研究協議会大会報告

10月17日、財団研究員の片岡さんによって「戦後・大阪西淀川地域における大気汚染問題と住民運動」と題する報告が、地方史研究協議会大阪大会にて行われた。西淀川公害患者と家族の会所蔵の資料や、理事長の森脇さんなど運動を担ってきた人々からの聞き取りをもとに研究された修士論文を、発展させた発表になった。

この報告は、多くの人にあおぞら財団の資料保存活動を知ってもらう機会となり、特に東京の学会関係者に注目された。

第25回全史料協新潟大会への出席と新潟水俣病資料館設立関係者との面談

10月27～29日の全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会に、財団から達脇さんが参加された。公害問題資料を保存している団体として、全国の研究者と交流を行ったのは初めてということで、関東の研究者の方々に、現代資料についての関西の先見性のようなことを持ち上げられて、苦笑せざるを得ない気分になったと報告されていた。

また、新潟には新潟水俣病の歴史がある。患者団体と新潟県により「水俣病資料館」の建設が予定されて、なんとか工事着工の見通しがついたが、現在においても設立と運営が滞りがちだと聞いていた。水俣病のイメージにより水質汚濁が続いていると誤解され、魚が売れなくなるとする地元漁協の反対、資料展示により患者がさらし者にされると異議を唱える患者会の一部など、資料館の存在意義が複雑になってしまったためという。

達脇さんは、26、28、29日の３日間に、行政関係者、公害発生当初から関わってきている医師、弁護士、運動関係者などに会い、いろいろな立場の話を聞くことができたようだ。またこれには研究会のメンバーでもある佐々木和子さんにも同行していた。公文書館施設が充実していると言われる新潟で、新潟水俣病資料館に対する歴史資料関係者の関わりの薄さを実感されたということであった。

現在進行中の資料目録づくり

現在私が目録づくりを行っているのは、西淀川大気汚染訴訟の弁護団収集資料である。

西淀川訴訟では、弁護団が到達班・疫学班・関連共同性班・被害班・道路班・歴史班に分かれて、問題解明につとめてきた。そのために収集された資料が、現在西淀川公害患者と家族の会に35箱保存されている。

この弁護団収集資料は、医学・経済学など難解なものが多く、持て余してしまうことが度々ある。しかし、幸せなことに、財団の職員の半数は公害反対闘争に関わってきた人々のため、この難解な資料を解説してもらいながら目録づくりができる恵まれた環境にある。

にもかかわらず、同時に非常につらい環境でもある。何故資料保存をしなければならないのかを、目の前にいる運動の当事者に理解してもらわなければならないからだ。歴史認識のずれを言われて久しいが、自分が実際その立場に立つと、歴史を語る言葉を失ってしまうのを実感する日々である。

工業社会の中で生きていく上で、公害問題が切っても切り離せない問題であることを考えると、あおぞら財団で保存しようとしている公害問題資料は「未来の宝」になるかもしれず、可能性大と言える。この「未来の宝」が宝であり続けられるように、微力ながら力を尽くしていきたい。（はやしみほ、あおぞら財団ｱﾙﾊﾞｲﾄ）

■文献情報

書　名	編著者	発行日	発行所
平成年度川西市発掘調査概要報告－阪神・淡路大震災復旧・復興に伴う発掘調査－	川西市教育委員会	1999.03.31	川西市教育委員会
発掘された明石の歴史展－震災復興調査の成果から－	明石市立文化博物館	1999.11	
阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会　活動記録		1999.11	阪神淡路大震災被災文化財等救援委員会事務局
阪神・淡路大震災年の記録　公共・大学図書館、専門機関、関連団体施設へのアンケート調査報告書	震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク	2000.01.17	編著者に同じ
阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム－震災復興の発掘調査を検証する－	「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウム実行委員会	1999.12.04	編著者に同じ
災害から文化財を守る－阪神・淡路大震災文化財復旧・復興事業の記録 第２分冊	兵庫県教育委員会	1999.03.31	阪神・淡路大震災文化財被災状況報告書刊行会

（14ページに続く）

■新聞記事より

毎日新聞　1999年12月８日朝刊　阪神版(21面)より

神戸新聞　2000年１月４日朝刊　17面より

読売新聞　2000年１月13日夕刊より

毎日新聞　2000年１月15日朝刊　17面より

朝日新聞　2000年１月25日朝刊　阪神版(27面)より

（９ページより続く）

論文名	筆者	掲載誌	巻号	発行日
歴史的災害の復興における地域社会と史料保存－被災地から発信する地域史研究の視角－	大国正美	『地方史研究』	49-5	1999.10.01
阪神・淡路大震災と埋蔵文化財－復興調査年のあゆみ－	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』	34	1999.11.01

■お知らせ

◇「火垂るの墓を歩く」第１回研究会兼実行委員会

昨年夏に実施した「火垂るの墓を歩く」見学会を、毎年連続して開催すべく、実行委員会が結成されました。昨年の甲陽園コースに続き、今年は香枦園浜コースを考えています。

この企画の実行委員会が、同時に阪神地域の戦争史に関する研究会として、今後継続的に例会を開催していくことになりました。

日時　2000年４月１日(土)午後６時～８時

場所　小田公民館（ＪＲ尼崎駅、北に出てすぐ東へ約100m、左手再開発ビル内）

内容　会の趣旨説明と今後の予定（正岡茂明氏）

空襲・戦災を記録する会第30回全国連絡会神戸大会について

（中田政子氏、神戸空襲を記録する会代表）

阪神地域の空襲・戦災史研究について（辻川敦氏、尼崎戦後史聞き取り研究会）

◆尼崎戦後史聞き取り研究会

日時　2000年４月６日(木)午後６時30分

場所　尼崎市立地域研究史料館

報告　松井美枝氏（大阪市立大学文学部）戦前の紡績労働に関するご報告をいただく予定です。

参加申し込み・問い合わせ先　尼崎市立地域研究史料館内・辻川（TEL06-6482-5246）

＊＊

☆このニュースは、ＮＩＦＴＹ－Ｓｅｒｖｅの歴史フォーラム・歴史館２番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。

★史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
http://www.archivists.com/ または http://member.nifty.ne.jp/archivists/
または http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/

＊＊

“史料ネットNews Letter”購読と募金のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。

引き続き、ご協力をお願いしています。“News Letter”は年４回発行、年間購読料(郵送費)500円にて受け付けています。下記支援募金口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みいただくか、あるいは電話、FAX、e-mailのいずれかの方法で史料ネットセンターまでお申し込みください。

史料ネット活動支援募金　（郵便振替）

名義　阪神大震災対策歴史学会連絡会　　口座番号　０１０９０－７－２３００９

史料ネットNEWS LETTER No.20　2000.3.7（火）
編集・発行　歴史資料ネットワーク　〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565　e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp